

現代能歌劇「野宮」一幕二場

原作：能「野宮」世阿弥元清作・紫式部作源氏物語第十條「賢木」の一部を挿入

時：南北朝時代 晩秋9月7日の夕暮れ 所：嵯峨野 野宮の旧蹟

登場人物

六条御息所の霊（メゾ・ソプラノ）

諸国一見の僧（バリトン） 地謡（光源氏・テノール）

第一場「野宮の旧蹟」

名乗り

名乗り笛とともに諸国一見の僧が登場

諸国一見の僧のARIA

僧 諸国一見の旅をしています。京の都の左京、洛陽の名所旧蹟を巡り終えました。これから嵯峨野を訪ねてみようと思います。 一間奏一（あたりを見渡して）

晩秋の嵯峨野はゆく風が一層身にしみる。 一間奏一 人に尋ねたところ、この森は野宮の旧蹟だそうです。ちょっと参詣してみましょう。 一間奏一（あたりを見渡して）

あの樹皮をつけた黒木の鳥居や、小柴の垣根は昔と変わらぬ風情なのでしょう。ちょうどこの時期は、齋宮が身を清める生活を送るために、野宮に入る時節だそうです。良いときに参詣することができました。 一間一（あたりを見渡して）

下げ歌：（初め中音域で、中音域・低音域をを繰り返す、低音域で終わる）

僧 伊勢の神様は分け隔てをしませんから、教えが正しくいきわたり、そして参詣する人々の心が皆、清らかに澄みわたって、沈みゆく夕陽の風情を、際立って美しく眺められるのです。

一間奏一 （六条御息所が静かに登場する）

次第 六条御息所のARIA

六条 野宮はいろいろな花が楽しめますが、今は秋の終わり、寂しさが一層身にしみる季節になりました。

指し：（旋律やリズムにとらわれずに朗唱する）

夕暮れ時は袂が露にぬれて、あふれる涙で袖が濡れて、袂と袖は一層しおれてしまいます。

秋の夕暮れの寂しさは身を砕くほどで心が萎えまいます。それは日暮れに萎む花と同じでしょうか。

下げ歌 今日は九月七日。毎年の今日、私は人に知られず野宮に帰って参ります。

上げ歌：（初め高音域、途中中音域、又高音域になり低音域で終わる）

美しいいろいろな花の色にかわって、秋の野宮は身にしみて深くなっています。昔を忍ぶ草衣はどこにもなく、この世に帰ってきても平安時代の華やぎもうありません。それでも現世と来世、二つの世を行き帰りするのは、誠に辛いものがあるのです。 一間奏一

掛合い：（二人で謡う）

僧 ちょっと失礼いたします。そこで夕陽を眺めながら、野宮の昔を偲んでいた者です。大変ぶしつけですが、貴女様はどちらのお方でいらっしゃいますか？

六条 野宮は昔、齋宮に立たれたお方が一年間、身を清める仮の住まいでございました。この慣わしは久しく途絶えておりましたが、今日は九月七日、ありし昔を偲ぶ日でございます。それでこの野宮を掃き清めて、神事を行っていたところなんです。何れのお方が存じませんが、野宮を詣でるのは大変畏れ多いことでございます。早々にお帰りなさいませ。

僧 いやいや、これはこれは、（恐縮して打ち消す）私は不都合な者ではございません。

（柔らかく）身の行末を定めない、世を捨てた諸国一見の僧でございます。どうぞご安心ください。 一間奏一

この野宮を掃き清めて、過ぎ去った昔を偲んでおられるそうですが、そのいわれをお聞かせいただけますか。

六条 源氏の君がここ野宮にお出でになりましたのが、九月七日の今日でございます。

源氏の君は御簾の下から榊の枝をさ

し入れて、和歌を詠まれました。

（地謡がその場で立ち、源氏の和歌を詠う）

地謡（源氏）

「変はらぬ色をしるべにてこそ斎垣を 越えはびりにけれ、さも心憂く」(源氏物語第十条「賢木」)
榊の変らぬ色を私の心の証 にして、神社の垣根を越えてまいりましたのに、本当に冷たいですね。

六条 そこで御息所が返した和歌は、

「神垣は証の杉もなきものを、如何にまがへて折れる榊ぞ」(源氏物語第十条「賢木」)
神社の垣根には目印の杉もないのに、何を間違えて折った榊なのですか」と返されました。

僧 これは面白いお話です。いま貴女が持っておられる榊の枝も、昔と変わらぬ色をしています。

掛合い：(二人で謡う)

二重唱：榊だけが、昔と変わぬ常磐の色

六条 秋の終わりの森の小道

二重唱 色づき散った紅葉や 枯れ野の草で

六条 野宮あたりは冬の装い

(地謡がその場で立ち謡う)

三重唱(六条・僧・源氏)

草葉に荒れる野宮の 儂い小柴垣の野宮に

上げ歌：(高音域に始まり中音域に終わる)

六条御息所のアリア

六条 九月七日が巡り来て、昔を偲ぶ私の心は、今でも調理場からもれるかすかな光のように、外に漏れていないか気にかかります。

三重唱(六条・僧・源氏)

ああ 寂しい野宮

ああ寂しい ここ野宮は…

僧 もっと御息所の話を聞かせ下さい。

繰り：(最高音より更に高く音)

六条御息所のアリア

六条 御息所様が華やかに一世を風靡して、世に時めいておられた頃は、帝の弟の前皇太子と夫婦の契りを結ばれて、幸せで愛情深く暮らしておりました。

指し：(リズムにとらわれに)

三重唱(六条・僧・源氏)

逢う者はやがて別れる世のさだめ。間もなくお二人は死別されました。

思うに任せぬ 儂い世。やがて帝の次男である源氏の君が忍んで通うようになりました。

源氏の君のお心はその後どう変わったか。逢瀬も途切れる仲となりました。一間奏一

曲：(七五調を崩して変化のあるリズムを用いる)

しかしさすがに源氏君。御息所様をいやな人とお決めにならず、嵯峨野の草を踏みけて、九月七日野宮にお越しになりました。

地謡(源氏)

御息所に心惹かれた頃の逢瀬を思い出しました今、この上なく愛しく思い乱れて、過去を悔い、将来を憂いながら、二人で涙にくれました。御息所がとても愛しく、伊勢への下向を思いとどまるように話しました。一間奏一

三重唱(六条・僧・源氏)

美しい夜空を二人で眺めて

しみじみ眺めて 月の沈む頃

愛しい思いを御息所に打ち明けました

御息所の心の中の

源氏の君への辛い思いは すっかり消えて

もうこれまでと心に決めた諦めは

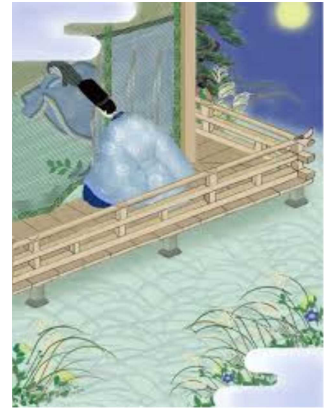
揺れ動き 思い乱れました

地謡(源氏)

和歌 「あかつきの別れはいつも露けきを こは世に知らぬ秋の空かな」(源氏物語第十条「賢木」)

和歌 「おほかたの秋の別れも悲しきに、鳴く音な添えぞ、野辺の松虫」(源氏物語第十条「賢木」)

秋の別れは悲しいのに



野の鈴虫よ
鳴いて一層悲しくしないでおくれ 一間奏一

次第

六条 やがて九月十六日、齋宮が伊勢へ向かう日が参りました。桂川で櫛をつけた白木綿を水に流し御祓をいたしました。川波に浮かぶ浮き草のような白木綿を眺めながら、寄る辺ない心は水に誘われて、伊勢の鈴鹿川へと旅立ったのでございます。
源氏の君はしみじみと感慨深く思われて、櫛の枝にお手紙を結び、御息所に送られました。

地謡 (源氏)

和歌 「ふりすてて今日は行くとも鈴鹿川 八十瀬の波に袖は濡れじや」(源氏物語第十条「賢木」)

六条 翌日和歌が返ってまいりました。

返歌 「鈴鹿川八十瀬の波に濡れぬれず、伊勢まで誰か思ひおこせん」(源氏物語第十条「賢木」)
鈴鹿川の波で袖が濡れても、伊勢まで誰が思いを寄せてくださるでしょう。

三重唱 (六条・僧・源氏)

齋宮に付添って、親子連れで伊勢へ赴くという前例のない下向をなさる御息所のお気持ちは、さぞ口惜しかったことございましょう。一間奏一

論議

僧 あなた様は何もかもご存じですね。お名前をお聞かせください。

六条 名乗っても仕方なく、恥ずかしい身の上。私の名前が世間に知れると困るのです。ですから、名も知れず亡くなった者として、御回向下さいませ。

僧 亡くなった者と聞けば、不思議なこと。それではこの世を儂くも……。

六条 去って久しい平安の昔、その名も残る六条の御息所とは……私でございます。(下手に退場)
一間奏一

三重唱 (六条・僧・源氏)

秋風の吹く森の夕暮れ
夕べの月の幽かな木影のその下に
樹皮をつけた黒木の鳥居の 二本の柱に身を隠し (御息所ゆっくりと退場)

二重唱：御息所の霊は姿を消した。

中入り

第二場「幽玄」

時：その夜 所：同じ嵯峨野の野宮

登場人物

六条御息所の霊 (メゾ・ソプラノ)

諸国一見の僧 (バリトン) 地謡 (テノール)

謡い

僧 森の苔衣に片袖を敷いて、草を筵に横になっていると、去って久しい昔が思い起こされます。
夕暮れの頃に出会った御息所の霊を、夜もすがら回向しているところです。
観自在菩薩 行深般若波羅蜜多時 照見五蘊皆空 度一切苦厄

一声

笛と小鼓による静かな登場音楽

下げ歌

：(初め中音域で、中音域・低音域をを繰り返す、低音域で終わる)

六条 懐かしい野宮に、秋の千草をつけた花の車に乗って、また参りました。

掛合い

僧 これはこれは不思議なこと、月の光がかすかに射し込む中、思いがけず、簾をかけた網代車にお乗りになった御息所様ではありませんか。

六条 去って久しい平安の昔、賀茂の祭りで見物の車が隙間なく立ち並ぶ中、人々を払いのけて騒ぎ立てる左大臣家のお車があって、

地謡 「この車は今を時めく左大臣家のお車だぞ！」

六条 轆にとりつき

地謡 轆にとりつき

六条 後ろに押しやり

地謡 後ろに押しやり

「あー！ こら！ やめろ！ 神様！ 御息所様 とうとう左大臣家の車に割り込まれました」

歌

六条 「ここでは何も見えません。祭の様子が何も見えない。悔しいです。
ただひと目お逢いしたくて、君への思いが晴れるかと忍んで来ましたが、忍んで来ましたが」
無力な私の身の程を思い知らされました。

三重唱（六条・僧・地謡）
思えばこれも前世の罪の報いでありまでしょうか。
我が身が恨めしく、こうして現世に戻って来ています。
どうかいつまでも迷う、私の心を御回向下さいませ。

六条 華やかだった平安の昔を思い起こし、月に和歌を捧げましょう。

謡い

六条 和歌「野宮のみやの月も昔や思うらん 影さみしくも森したつゆの下露」
野宮の月は昔を偲び、森の木影は寂しく露をやどします。

乗り地：（謡曲の謡いの部部分）

三重唱（六条・僧・地謡）
身のおき所もあわれなる

六条 去って久しいその昔

三重唱（六条・僧・地謡）
小柴垣の仮住まい野宮に

源氏 露を払って訪ねし君を

二重唱（六条・源氏）
ああ、わたくしも その人も

三重唱（六条・僧・地謡）
久しい昔の夢となり
誰をまつ虫の声 ぼうぼうと風の音
夜もすがら懐かしき 懐かしき野宮。

破の舞

乗る：拍子にのる。

六条 野宮は伊勢神宮の神聖な仮住まい。野宮は伊勢神宮の神聖な仮住まい。
この鳥居を出入りする者は…、迷いの世界にあっては、神様に受け入れて頂けない。

三重唱（六条・僧・地謡）
迷いの世界にあっては、神様に受け入れて頂けないと、
迷いの世界にあっては、神様に受け入れて頂けないと、

二重唱（六条・源氏）
六条の御息所の霊は、秋の千草をつけた花の車に、また乗って、
迷いの世界から出て行かれました。

幕